

# 令和2年度 学校経営重点計画

学校番号（10） 学校名（大江小学校）

学校教育目標 <b>『子どもが笑顔で活躍する学校づくり』</b> ～2030年を見据え「生きる力」＝「どうにかする力」の育成をめざす～
---

現状と課題
○全体的に学力は高く、落ち着いた雰囲気の中で学習することができている。 ○素直で明るい子どもたちが多く、ボランティア活動、委員会活動など教師とともに喜んで活動している姿が見られる。 ○外遊びを好む児童は多いが、体力・運動能力面では全国平均に達しない項目があり、体力の向上が課題である。 ○家庭の教育に関する関心は、全体的に高く協力的であるが、過干渉・過保護である保護者も多く、子ども自身が考え、正しく判断し行動する力が弱まってきている。 ○人間関係調整力の低下を感じる。 ○児童数がどんどん増え教室が足りないのでプレハブ教室建築中。運動場はますます狭くなり、洗口場・トイレ等も足りない。

校長としての経営のポイント
どのように社会が変化しても生き抜いていく力、自ら考え判断し行動できる資質や能力を身に付けさせ、子どもに個人として自立する資質を身に付けさせることが義務教育の重要な役割であり、自分の使命だと考えている。「どうにかする力」は、予測できない未来に対応するための「自立・協働・創造」できる力である。「生きる力」＝「どうにかする力」と捉え、まず学校職員が共通したイメージをもち、学習や生活のあらゆる場面で意識し、各校務分掌等でどう展開していくか計画を立て、学校全体で継続的に指導できるようにする。また、子どもたちにも、「どうにかする力」をあらゆる場面で具体的に話し、意識付けていく。そして特別活動を中心に据え子どもとともに「笑顔で活躍する学校」を目指していく。また「どうにかする力」を家庭・地域でも付けていくために、地域の会合や広報誌で発信・啓発し、家庭教育・地域教育に連動していく。

変容した学校の姿
1 学習においても学校生活においても、子ども自ら主体的・協働的・創造的に取り組んでいる。 2. コミュニケーション能力が高まり、人間関係調整力がつき、円滑な仲間づくりができる。 3 家庭や地域でも子どもが主体的に行動できるようになる。

重点目標		評価指標	主な具体的方策
徳	PDCAサイクルに基づいた特別活動や道徳科の授業実践と4つの心の日常化に取り組み、指導と評価の一体化を図る。	学校評価において、①豊かな心を育む教育の推進の3つの項目において、昨年度よりそう思う+どちらかといえばそう思うの割合をアップ。	○学級活動におけるPDCAサイクルを徹底する（学級会→実践→振り返り→次の活動） ○道徳の時間における「日常」の振り返りの徹底と道徳的価値付けの場を設ける。 ○4つの心の日常化を常に意識できる教室環境づくりを工夫する。（振り返りシート等の掲示）
知	「授業づくり5つの視点」に基づいた授業改善と主体的・協働的な学びの場づくりに取り組む。	学校評価において、②確かな学力を育み教育の推進3つの項目において、昨年度よりそう思う+どちらかといえばそう思うの割合をアップ。	○「授業づくり5つの視点」に基づいた日々の授業の計画・実践・評価を行う。 ○特別支援教育の視点を取り入れた個別指導、個へのかかわりを徹底する。 ○ICTを活用したわかる授業を実践する。 ○学年に応じた自主的・積極的な家庭学習を進める。

## ◇働き方改革について

目標	現状	評価指標	主な具体的方策
目標1 正規の勤務時間外の在校時間が1ヶ月80時間を超える教職員数が0人にする。	昨年の実績をみると、80時間を越えたのは教頭と教諭1人の2人である。	全月で時間外勤務時間80時間以上0人を目指す。	○教頭の長期休業中の出退勤時間を定時にする。 ○毎月定時退勤日の必要性を全職員で共通理解、実践する。 ○教頭の仕事を主幹教諭と分担し効率をあげる。
目標2 教職員の正規の勤務時間外の在校時間を対H29年度(※)比25%減にする。(※39時間53分)	昨年度の教職員の正規の勤務時間外在校時間は1か月当たり平均33時間である。	全月で時間外勤務時間外在校時間を40時間以下にする。	○月半ばで全職員の在校時間を把握し、過重労働ぎみの職員に声をかける。 ○月初めに先月の労働状態を示し、教職員自身の働き方改革への意識を高める。
目標3 教職員の正規の勤務時間外の在校等時間を1ヶ月45時間以内、年間360時間以内にする。	1か月平均45時間を越えた職員は、8人である。	全月で時間外勤務時間外在校時間を40時間以下にする。	○職員の校務の割合についてPDCAサイクルで学期ごとに見直す。